

<A分科会 カリキュラム・教材開発>

1) 「習得と活用」を意識した学校図書館のあり方

～「習得と活用」を意識した調べ学習とこれまでの調べ学習の比較～

中條 敏江(白山市立湊小学校)

「習得と活用」を意識した学校図書館の実践を分析したところ、これまでと比べて、提供する資料のありかたや単元計画での図書館利用のありかたに変化が見られた。資料の提供としては、種類が少なく限られた資料を複数準備する場合が見られた。また、単元計画としては、習得したことを活用する場面は単元の一部であり、調べる時間が短く全体指導を多く取ること、また、指導者も児童も取り組みやすくストレスが少ないことがわかった。

2) 年間計画を実施につなげる図書館運営の一取り組み

～なかなか実施されない『年間計画』を一步進めるために～

中野 淳子(白山市立東明小学校) 橋本 絹代(白山市立蕪城小学校)

学校図書館の年間計画はほとんどの学校で作成されている。しかし、計画通りに実施できている学校は多くない。そこで、どのくらい実施できているのか、実施しやすい要因、実施できない要因は何かを調査した。その結果、PDCAサイクルを活かして行くと実施しやすいこと、とりわけ、評価の段階(Check)が重要であることが明らかになった。

3) 授業研究支援システムの機能と活用方法の検討

篠島 祐貴(富山大学大学院教育学研究科) 黒田 卓(富山大学)

授業力向上に向け、教師には日常的に効果的な授業分析を行うことが求められる。そこで、授業観察時に映像と観察記録を同期する授業研究支援システムの構築が必要であると考えた。本研究では、映像とチャット機能が同期するTV会議システムを用いた授業研究を実施し、参加者へインタビュー調査を行った。そして、「授業観察時における映像と記録の同期」の効果、改善が必要な機能、授業研究支援システムの活用方法についてそれぞれ検討を行った。

4) ドリル教材に合わせたフラッシュ型教材の活用による新出漢字習得の効果

宮崎 靖(砺波市立砺波東部小学校) 高橋 純(富山大学)

学習指導要領改訂では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる」ことが改訂の基本方針の一つとして示されている。そこで、漢字学習において、従来から使ってきたドリル教材に合わせ、ICT活用の一つであるフラッシュ型教材を活用し、新出漢字の練習を行った。その結果、特に、中位・下位群の子どもたちが日常的な漢字学習の習慣を身に付け意欲的に練習し、一定レベルの新出漢字の習得する力を高めることができた。

5) 「かけ算」の理解と習得を助ける教材開発 ～「Adobe Flash CS4」を用いて～

佐々木 裕子(福井県教育工学研究会) 竹澤 朱実(福井市酒生小学校)

算数科において、子どもたちの理解と習得を助けるためには、視覚に訴えた課題を提示してその学習内容に関するイメージを頭の中に作ること、個に合わせて何度も繰り返し練習することが大切である。そのためには、ICT機器の利用が効果的であるが、いつでもだれでも気軽に使えるコンテンツとして、2年算数「かけ算」の教材ソフトの作成を試みた。

6) 福井県大学間連携取組フレックスのICT基盤

籠谷 隆弘(仁愛大学) 山川 修(福井県立大学)

福井県内にある6つの高等教育機関(大学・高専)が連携し、ICTを利用してゆるやかに結合し、そこで学ぶ学生や市民にとって仮想的な総合大学として機能させることを目的とした大学間連携プロジェクト「フレックス」を開始した。構築したICT基盤の中心となるSNS,LMS,e-Portfolioおよびこれらの統一認証について報告する。

7) 学校の情報化の促進を意図したICT活用環境と教員研修の工夫

笹原 克彦(富山市立山室中部小学校)

富山市立山室中部小では、教員のICT活用が日常化し、国語、社会、算数、理科においては、全授業時数のうち約90%の時間で、何らかのICTを活用している。また、学校WEBは、全校体制でほぼ毎日更新されるなど、学校の情報化がかなり進んでいる。これら学校の情報化を促す、ICTの活用環境と教員研修の工夫について検討した。全教室へのICT機器の常設、サポート体制の充実と、ICTを活用した授業づくりの悉皆研修、ICT活用の技能向上を目的とした参加自由形研修の実施によって、ICT活用は日常化し、学校の情報化が進んだ。

＜B分科会 授業設計・メディア活用＞

1) 小学校の授業におけるハイビジョンの活用

～実験・観察・実習等を助けるカメラとディスプレイの活用～

今井 直人(白山市立蕪城小学校)

地上波デジタル放送の普及に伴い、ハイビジョン規格の映像機器が増え、学校現場にも導入が進みつつある。これからは、小学校の授業においても、学習者の理解を助け、授業を効果的、効率的に進めたりするために、様々な場面、様々な形態での活用が考えられる。ここでは理科の実験等、日常的な授業での活用例から、ハイビジョン画像活用の効果や可能性をさぐる。

2) 表現運動の対象へのイメージ化におけるデジタルテレビの効用

島田 瑞代(白山市立蕪城小学校) 村井 万寿夫(金沢星稜大学)

小学校の表現運動において、創作的な表現の経験の少ない子どもたちに、対象のイメージを豊かに広げる手だてとして映像を見せることで動きづくりにつながると考えた。そこで、第4学年の表現運動の実践の中でデジタルテレビを題材のイメージの共有化や創った作品の鑑賞に活用し、その効果を動きの広がりや多様性を中心に探った。その結果、活動の意欲付け・表現の多様性・相互評価の高まりの三点において効果を上げ、今後の活用の可能性についての示唆を得ることができた。

3) 2台の大型提示装置を活用した児童が自らの考えや意見を発表する学習活動が

学習者の学習態度に与える影響

小林 祐紀(金沢市立小坂小学校) 中川 一史(放送大学)

2台の大型提示装置を活用した授業において、「児童が自らの考えや意見を発表する」学習活動は学習者にどのような影響を与えるだろうか。本研究は、すでに2015年の教室のICT環境(2台の大型提示装置)を整えている学級で実施された「児童が自らの考えや意見を発表する」学習場面を調査対象の前提とし、児童への質問紙調査、教師へのインタビュー調査を実施した。その結果、「児童が自らの考えや意見を発表する」学習活動は、学習者にとって評価値が高く、学習活動の主体である発表者だけではなく、聞き手の学習者にも変容を及ぼしている。学習者を主体的に変容させる作用があることが明らかになった。また、授業者の学習効果の捉えから、本研究で対象とした学習活動は、多くの学習効果が期待できると示唆された。

4) 入門期の国語科における写真と挿絵の効果的な活用法の検討

～「見る」「見せる・つくる」学習活動を取り入れた「読むこと」の指導から～

西田 素子(金沢市立犀川小学校) 中川 一史(放送大学) 石川 等(甲府市立大國小学校)
森下 耕治(光村図書出版)

小学校入門期の「読むこと」における指導の難しさや表現の未熟さを補う手段として、写真や挿絵を意図的に活用した実践を行った。実践によって確かめられた効果的な手立てを整理したところ、教材研究の際と写真や挿絵を「見る」「見せる・つくる」際のいくつかの視点が明らかになった。

5) デジタルカメラを用いた授業省察における省察内容の分類

福田 晃(金沢大学教育学研究科) 中川 一史(放送大学) 加藤 隆弘(金沢大学)

本稿は、デジタルカメラを用いた授業省察の過程を明らかにし、省察内容を分類することを目的としたものである。収集されたデータをグラウンデッド・セオリーに基づき、分析した結果、省察内容は【想起のみ】【手立ての検証】【児童の変容の見取り】【思考の読み取り】に分類することができた。省察を踏まえ、実際に課題が改善された事例は全て【手立ての検証】に属する事例であった。

6) 話す力を育成する自己モニタリング手法を使った授業設計と効果

板岡 有子(志賀町立志賀中学校) 清水 和久(石川県教育センター)

現代社会に求められている力は、相手の意識を読み取り、自分の意図することを的確に発信する力であると言われている。しかし、双方向のコミュニケーション能力の育成が求められている学校現場において、授業時数確保の問題や思春期特有の特徴が大きな壁となっている。スピーチ力向上の一手法としてHDRを使った授業に取り組んだ結果、自分の表現の発信を客観的に分析し、改善視点を持ちながらスキル向上をめざす授業を行うことができた。スピーチ学習へのハードルを低くするとともに「話すこと」に対する意識の変容が生まれた。

＜C分科会 授業設計・交流学习＞

1) 生活科に学校間交流学习を絡めた相互対話力の育成 ～小学1年生での実践を通して～

西野 聡子(金沢市立浅野川小学校) 益子 典文(岐阜大学大学院)

日々の授業で行われる話し合いにおいて、自分の思いを伝えたいという話し手と、それを受け止めたいという聞き手の相互の心の通わせ合いが行われにくくなっている現状から、今年度担当した小学1年生を対象に、対話力の育成を図る。そのために、具体的な活動や体験から学ぶ生活科の単元に、交流学习活動を絡めた授業を設計した。その結果、自分の話す内容を相手に分かって欲しいという思いや、分かってほしいという思いがはたらき合って対話する姿が育った。

2) 内灘町PRと局面国際交流 ～児童の「やりたい！」意欲を大切に～

角納 裕信(内灘町立向栗崎小学校) 清水 和久(石川県教育センター)

新学習指導要領では高学年から英語教育が始まることになるので、町として中学年から先行して学習して来た英語を続ける場合には国際理解という要素を加味することが必要になる。そこで3年生でも無理なく行えるように、地域学習の交流・発信先の一環として、同地域の学校や、マスメディアとしてのラジオ局、そして国際交流先のイタリアと複数を想定することで児童の意識に沿った無理のない「交流」「発信」を行うことができた。

3) 鑑賞学習におけるアートマイルプロジェクトの活用 ～願いや思いを形や色に……～

正木 真紀子(金沢市立米泉小学校) 清水 和久(石川県教育センター)

国際交流においてお互いの考えや立場を共有し、尊重することは重要である。そこで図工において、カナダと国際交流学习(アートマイルプロジェクト)を通して色や形から感ずる思いを共有し、表現することをねらいとした鑑賞学習および表現活動に取り組んだ。カナダの4、5年生のクラスとの掲示板でのやりとり、自己紹介カード・学校紹介CDの交換、TV会議、絵の協同制作等を通して、共同制作者である相手の存在を意識させることができた。結果、共同作業をする相手の存在感は、絵を作成する原動力となり、表現力の向上や異文化理解にもつながった。

4) 国際交流のための活動を通してのコミュニケーションへの意識の変化

～アートマイルプロジェクトを中心に～

飯田 淳一(内灘町立清湖小学校) 清水 和久(石川県教育センター)

本学級の児童は発言が苦手と感じている児童が多く、自分の思いを伝えようとする意欲が弱い、声が小さい、リアクションが弱い、といった傾向があった。また4月時点の外国語活動のアンケートでは、英語の学習意欲に関して他のクラスと比較してあまり高くなかった。そこで、外国の小学校と交流して活動するアートマイルプロジェクトに参加し、相手意識を大事にした一連の活動を取り入れた。その結果、コミュニケーションへの意識、外国語活動の学習への意欲の向上がアンケートから見られた。

5) 国際交流学习におけるTV会議の位置づけとその効果

～アートマイルプロジェクト及び英語活動における取り組みを通して～

清水 和久(石川県教育センター)

交流学习の一環としてのTV会議を参与観察することによって、学習者は、英語で発信する事に自信を持ち、相手の情報を受信し、双方向のやりとりができることに楽しさを感じていることがわかった。また、教師はTV会議の映像の不鮮明さや言語の壁をさまざまな工夫によって補う事が可能であり、教師自身がTV会議におもしろさを感じる事が次へのTV会議につながる事がわかった。

6) 学校間交流を利用した国語科での推敲能力を高める指導法に関する研究

～コラボノートの活用を通して～

布川かほる(中能登町立鹿西小学校) 稲垣忠(東北学院大学) 木下浩利(美郷町立渡川小学校)

新学習指導要領の改訂で言語能力の育成が重要視されている。全教科・領域での育成が必要とされているが、中核となるべき国語科の言語活動において、学校間交流を活用した相互評価を活かして、児童の推敲能力を高めることができないかと考えた。そこで、本を推薦するリーフレットに掲載する「あらすじ」と「おすすめ文」をコラボノートに書き込み、交流学习級と対象教室とが異なった視点で評価し合う実践研究を行った。推敲前後を比較し変容を分析することで、その有効性が確かめられた。